

『二上峰』で、古巖と懇意にしていたことの知られる伊勢貞丈との関連を思わせる「貞丈案」云々の書き入れ、並びに各種本草書からの引用が多数存する。また、版本は伝寂蓮本を底本とするが、異同に関して同じ伝寂蓮本系統の写本と共通することは希であるのに対し、神宮本の傍注と一致する場合が多い。このことから、本草書の引用といい、神宮本は現存未詳の多紀安元法印所蔵本と何らかの關係を持つことが想像される。

⑦の西園寺文庫本は、立命館大学図書館作成の目録によれば書写者、書写年次ともに未詳、一八世紀の伝本と報告されているが、蔵書印を参考にすると、一七世紀後半まで遡ることができる。現在の所蔵先である立命館大学図書館と西園寺文庫の蔵書印各一顆の他、不鮮明な蔵書印二顆、計四顆の蔵書印が認められる。後者の二顆は鮮明な状態で同文庫の『古今香之札』中にも存し、それぞれ「藤原」「實輔」と刻まれる。これらの所蔵印の主は西園寺家二五代実輔である。本書は天和二年（一六八二）一月三〇日から貞享二年（一六八五）正月五日の間に西園寺家に収蔵され、以来同家に伝来した。

②を除く現存諸本中で古鈔本に次ぐ古い写本に位置する。

実輔は、元は関白鷹司房輔二男で兼敦と云い、後に西園寺家へ迎えられ家督を嗣いだ。実輔と改名したのは兼敦二二歳の天和二年（一六八一）一月三〇日、この時権中納言従三位、翌三年正三位に昇るが、二年後の貞享二年（一六八五）正月五日、二五歳で薨じた（『公卿補任』『系図纂要』参照）。

*『香譜』卷下と『陳氏香譜』卷二を対照した（両書とも四庫全書・子部一五〇所収）。

* 新校群書類従本解題(『新校群書類従解題集』所収)(昭四)、『市立名古屋図書館別置図書目録』(昭四八)、『杏雨書屋蔵書目録』(昭五七) 参照

3 『神宮文庫図書目録』(大一一)、『群書解題』(昭三七)、『関西大学所蔵岩崎美隆文庫五弓雪窓文庫目録』(昭五一)、『国書総目録 補訂版』(平一一三)、『古典籍総目録』(平二)、『立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録』(平二) 参照

* 国文註釈全書所収本(木村正辞博士校訂。底本は屋代弘賢旧蔵本。岡本保孝本、紀州徳川家本をもつて校合) 冒頭には、『尊卑分脈』から抄出したと思しき狩谷椽齋本所掲の範兼系譜が引かれる。

* 佐佐木信綱氏『日本歌学大系』一、川瀬一馬氏『古辞書の研究』、山田洋嗣氏『和歌童蒙抄の形成』(『立教大学日本文学』昭597月号)、『和歌童蒙抄の注釈』(『和歌文学研究』昭599月) 参照

* 新校群書類従本解題(『新校群書類従解題集』所収)(昭四)、『群書解題』(昭三七)

* 次の頭書には、「承和秘方」という薫物の香りの善し悪しとその要因についての考えが記されている。

元弘二年三月十七日合之其香尤臭麝香似過

(「承和秘方」の上欄 32丁ウ)

* 河村文庫本の書写者「益根」は尾張藩書物奉行を努めた河村秀^{えい} 穎弟の秀根の二男として、宝暦六年(一七五六)誕生。父の秀根やその兄秀穎は国史や伝記に関心が高かった(『続諸家人物志』参照)。その子益根もまた国学家として知られる人物で(同書参照)、岡田新川に学んだ。新川は「群書二博覧」(同書)との評判を得た儒者であり、益根にも国学に留まらず幅広い分野の知識を授けたことが想像される。国学を基本とした方面に関心を置く益根が『薫集類抄』を書写したのは、本書に記載される平安時代の有職故実や実在の天皇、貴族達の伝や、底本が寂蓮自筆本の写本とされるところに関心を引かれてのこととであろう。益根自身の所蔵印の他、「河村秀根」の蔵書票、蔵書印も残るが、巻末識語中の書写年次は秀根が亡くな

ったの翌年のものであつて、実質的には益根独自の収蔵書と言える。

河村秀根

河村秀根、字君律、葎菴と號す。小字金之助、後復太郎といふ。秀世の第二子、秀穎の弟なり。享保八年十月十二日生る。年十一、公子國丸の小姓となり、後宗春に仕ふ。多田義俊、吉見幸和、速見爲常、冷泉為村、爲泰等に學ぶ。寛政四年六月二十四日歿す。年七十。

河村益根

河村益根、小字鋏九郎、後培二郎、乾堂と號す。秀根の二子なり。寶曆六年正月十二日生る。岡田新川に學び聰明なり。文政二年十一月十二日歿す。年六十四。

〔市立名古屋圖書館別置圖書目録〕一

第一章 第三節

西園寺文庫所蔵『薰集類抄』翻刻と校異

凡例

1 本文

- 一、立命館大学図書館西園寺文庫本「薰集類抄」上下巻を底本とした。
- 一、底本の誤脱、誤写と見受けられる箇所については原本のまま記し、他本の本文を脚注に示した。

- 一、歴史的仮名遣いに一致しない箇所、各種記号や符号の類も、底本のままに記した。
- 一、異体字は、原則として通行の字体に改めた。また、ある語句に用いる漢字について、字体の統一が成されていない場合は、最も通字に近いものに統一した。例外も存する。
 - 1 「占唐」「侍従」「条」に関しては、底本にある表記のままに記した。
 - 2 本文に符号或いは見せ消ちと認められる上書、あるいは傍注として異文等の書き入れが残されている箇所については、底本の字体を改めなかった。
 - 3 虫損により翻字が困難な場合、その箇所を空欄とした上で囲んだ(□)。

2 脚注

- 一、諸本の間に存する異文や書き入れを集成、記載した。
- 一、頭注などにより原文の字体に注意が及び、或いは校訂者が注意すべきと判断した箇所

については、表記のままに記し、続けて丸括弧内に通行の字体を記した。

一、底本「小」に対し「少」、「已上」に対し「以上」といった、同義語による使用漢字の相違に関しては、頭書や傍注の見られる場合に限り、脚注作成の対象とした。

一、各種符号や句読点については、その有無がいずれかの伝本で注記の対象とされている場合に限り、諸本の相違点を集成した。

一、脚注での諸本の略称は次の通り。

古 杏雨書屋鎌倉期写本

神 神宮文庫本

羣 群書類従正編本

鶴 鶴舞中央図書館河村文庫本

岩 関西大学図書館岩崎美隆文庫本

杏 杏雨書屋江戸期写本

1 薰集類抄(外題) 全

(表紙見返は白紙、一、二丁は遊紙

二丁裏側に立命館大学図書館所蔵印二点有り)

2 薰集類抄

諸方 傳方之人依時代立次第

梅花

侍従

落葉

坎方

増損化度寺

百歩香 承和

令人體香

潤面膏 落梅公主

建醫師衣香

焼香

供養香

観世音菩薩留濕香

荷葉

菊花

黒方

薰衣香

衰衣香

百和香

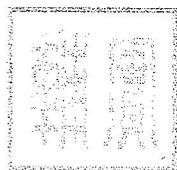
浴湯香

甲煎 丹陽公主

香粉

印香

金剛頂經香



(表紙)

1 薰集類抄全

神 薰集類抄上
古 薰集類抄上
鶴 薰集類抄上下
岩 薰集類抄上下
羣 (外題無し)

2 薰集類抄

神 薰集類抄上
古 薰集類抄上
香 薰集類抄上

3 頭書有り(益根按宗洪芻(改行)香譜有唐化度(改行)寺牙香法)

付洛陽薰衣香
會昌薰衣香
増損薰衣香

付洛陽薰衣香
會昌ノノノ
増損ノノノ

5 衰衣香

神 衰衣香
羣 衰衣香
6 目次に「令人體香」以降無し

7 印

神 印
印
香 印
羣 印

3 才

3 才

麝香四朱 薰陸二朱 已上小五兩一分四朱

四條大納言 源定 正二位大納言左近大將 嵯峨天皇源氏

沈八兩二分 甲香三兩二分 ^三 甘松一分五 5才

白檀二分三朱 ^四 丁子二兩二分二 麝香二分

薰陸一分六 甲香一兩三分 甘松三朱

沈四兩一分 丁子一兩一分 麝香一分

白檀一分一朱 薰陸三朱 合八兩一朱

八條宮 本康 一品式部卿 仁明天皇第五親王 母從四位上滋野繩子 貞主女也

沈八兩二分 麝唐一分三朱 甲香三兩二分 5ウ

甘松一分 白檀二分三朱 丁子二兩三分

麝香二分 薰陸一分

小野宮 惟香 ²⁰ 文德天皇第一親王

沈八兩二分 占唐一分三朱 甲香三兩一分

甘松一分 白檀二分三朱 麝香二分

丁子三兩二分 ²¹ 薰陸一分 小定 6才

染殿宮 貞保 二品式部卿 清和天皇第四親王

沈八兩二分 丁子二兩二分 ²² 甲子三兩二分 香殿

占唐一分三朱 白檀二分三朱 甘松一分 ²³

薰陸一分 麝香二分 或者諸香合蜜之後可和庸 ²⁴ 也此說可秘云

19 「三」有り 杏 岩 無し

20 惟香 神 羣 惟高 古 鶴 杏 岩 惟香

21 三 神 三 古 鶴 杏 岩 羣 二 22 甲子 香 古 甲子 杏 羣 甲香

23 可 鶴 寸

24 庸 古 鶴 杏 岩 麝

件方承保三年三月晦日典藥頭雅忠朝臣
注送之父忠覺入道於小一條院所寫取也
即忠覺自筆也

山田尼 小一條皇后侍女 山田中務後拾遺作者
因幡權守致貞女

沈八兩二分 丁子三兩三分 占唐一分三朱

甲香三分 甘松一分 白檀三分 9ウ

麝香二分 薰陸一分

尼云梅花にハ薰陸者兩數すこしたらさ⁴⁷

てい⁴⁸へし

沈二兩四朱 甘松二朱 甲香二分二朱

白檀二朱 丁子二分四朱 麝香四朱

いまふたくさの香⁴⁹いるなれと名たし⁵⁰

かにし⁵²らす⁵⁴

二⁵³條關白 敬通 關白大政大臣從一位道一公二男

沈八兩二分 占唐一分三朱 甲香二兩二分⁵⁵

甘松一分 白檀二分三朱 丁子二兩二分

麝香二分 薰陸一分

治曆四年四月六日被合梅花一躰⁵⁶大⁵⁷香十五

兩二分三朱甘葛合定十六兩一分三朱

堀川右大臣 頼宗 從一位右大臣 道一公三男⁶⁰

10ウ

10オ

47たらさて 神 たらさて^{不レ足}

48いへし 神 いる^放 固 鶴 羣 いるへし

固 羣 いるへし

49ふたくさ 神 ふたくさ^{二一 種}

50いる 神 いる^入

51なれと 神 なれど 固 なれとも

52しらす 神 しらす

53二鶴 三

54道一 固 道長

55二 固 鶴 杏 固 一

56躰 神 躰^{劑 放} 羣 劑

57大 固 大。

58二分三朱 鶴 三分二朱

59甘葛 神 ふりがな有り^{アマツラ} (一甘葛)

60道一 固 道長

61 沈八兩

62 占唐

甲香二兩二分

甘松一分

白檀二分

麝香二分

薰陸二分

丁子二兩二分

參議師成

從二位

小一條大將濟時孫

中納言通任男

或本二分可用心

沈香八兩二分

占唐一分三朱

甲香三兩

甘松一分

白檀二分三朱

丁子二兩二分

麝香二分

薰陸一分 已上小十五兩三分

11 才

沈香四兩一分

占唐四朱餘

甲香一兩一分三朱

甘松三朱

白檀一分⁶³一朱餘

丁子一兩一分

麝香一分

薰陸三朱 已上小八兩⁶⁴

或說

甘松香花一分

沈七兩三分

藿香一分四朱

白檀一分三朱⁶⁵

熟麝金三分

安息二兩一分

不知誰人

麝⁶⁶一分

甲香三兩二分⁶⁶

甘松二分

麝香二分

薰陸二分

丁子二兩二分

沈七兩二分

甲香二兩二分

甘松一分

沈七兩二分

甲香二兩二分

白檀二朱

丁子二兩二分

藿香四朱

麝金二分

荷葉

擬荷香也

夏月殊施芬芳

12 才

61 「沈、占唐、甲香、甘松」の順
「甲香、甘松、沈、占唐」の順

62 占唐 神 占唐 本ニ量ナシ

63 分 固 兩

64 小 固 十

65 固 麝 香 固 ここに「若二分」有り

66 二三 神 固 麝 香 固 二 羣 三

公忠朝臣 ⁶⁷ 天曆六年二月廿一日甲午進之

甘松花一分 沈七兩二分 甲香二兩二分 ⁶⁸

白檀二朱 ⁶⁹ 或三朱 熟麝金二分 代麝香 藿香四朱

丁子二兩二分 安息一分 ^{或無}

甘松三朱 沈三兩二分 ⁷⁰ 甲香一兩一分

白檀一朱 ^{或本無} 熟麝金一分 藿香二朱

丁子一兩一分 12ウ

山田尼

はちすの花のかとそいふなる一臍を

みつにワかちてあわする ⁷²

沈二兩四朱 甘松二朱 甲香三分二朱

白檀二朱 ⁷⁴ 丁子二分四朱 麝香四朱

いまふた ⁷⁵ くさの香 ⁷⁶ いるなれ ⁷⁷ となた ⁷⁸ し ⁷⁹ か

にしらす ⁷⁹ 13オ

或説

甘松香花一分 沈七兩二分 藿香一分四朱

白檀一分三朱 ⁸⁰ 熟麝金二分 安息二兩一分

不知誰人

甘松一分 沈七兩二分 甲香二兩二分

白檀二朱 ^{或三} 丁子二兩二分 藿香一分四朱

熟麝金二分 安息一分 13ウ

67 天曆 固鶴 天曆 ^{或慶}

68 固鶴 固 ここに「或一分」有り

69 或三朱 羶 或本三朱

70 二分 固 三分 羶 二朱

71 固 頭書有り(元弘二年三月合之 殊香麝金代麝香)

72 あわする ^{は袂}

神 あわする 固 固 あはする

鶴 羶 あはする 固 あはする

73 二 羶 八

74 固 固 固 ここに「すこしたら ^て有り

75 ふた ^二 くさ ^種 神 ふた ^二 くさ

76 いる 神 ^入 いる

77 なれと 神 なれど 固 なれとも

78 な 神 ^名 固 なも

79 す 鶴 固 ぬ

80 一分三朱 固 一分二朱 ^{若三分}

鶴 一分二朱 ^{若二}

固 一分三朱 ^{若二分}

81 二 鶴 三

侍從 亦名拾遺 補闕 82

秋風蕭颯として心にくきおりによそへ 83

たるへし

閑院大臣

沈四兩

甘松一兩

賀陽宮 或號院可尋之

沈四兩

甘松一分

滋宰相 小一条皇后方同之 又入道一品宮女房陸奥方同之

沈四兩二分

熟麝金一兩

或加占唐大一分又説停麝金加麝香小二分

又或用黄麝金

沈六兩三分 或小六兩

鬱金二分

若加占唐一分三朱 或小三朱

縱雖頗減不可過入之

丁子二兩

熟麝金一兩 已上小

甲香一兩

已上大

丁子二兩

鬱金一分

甲香一兩

14才

丁子二兩二分

甘松一兩

已上小 86

甲香一兩二分

已上大

丁子三兩三分 或小三分

甘松二分

甲香二兩一分

或小一兩二分 14才

若用麝香一分

82

神(五) 古(六) 鶴(七)

杏(八) 又ナルヘシ 古(九) 羣(十) 亦

83 古 無し

84 鶴 二

85 古 ここに裏書の書込有り(裏書の内容、異同等については別紙にて紹介)

86 小 羣 無し

八條宮

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩

15才

87

甘松一分二朱

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩

已上大

甘松一兩

熟麝金一兩

已上小

一説入麝香一説黃麝金 或加占唐小一分

合六種而此本無之和蜜合搗三千許杵⁸⁸

此二方者不傳男是承和仰事也延喜六年

二月三日典侍滋野直子朝臣所獻也

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩

已上大

甘松一兩

熟麝金五兩

占唐一分

已上小⁸⁹

15ウ

沈六兩⁹⁰

丁子三兩

甲香一兩二分

甘松二分

麝金二分

占唐三朱

已上小

小野宮

沈四兩二分

丁子二兩二分

甲香一兩二分

已上大

熟麝金一兩

甘松一兩

已上小

染殿宮

沈四兩^大

丁子二兩

甲香一兩

16才

甘松一分一朱

麝香三朱

占唐一分

87 固

「元弘云々」の頭書有り

88 許杵

固 杵許、

89 「小」有り 鶴 無し

90 六

固 鶴

小六 如本 小六

或諸香合蜜之後可和麝也 此說可秘

公忠朝臣

沈六兩

丁子三兩

甲香一兩二分

甘松二分

熟鬱金二分

占唐三朱 皆小

大和常生

沈四兩

丁子二兩

甲香二兩 或本一兩

鬱金二分

若無以麝代之

甘松二分一朱

已上小

沈四兩

丁子二兩

甲香二分

甘松二朱

麝香二朱

右二方是藏人所小舍人大和常生之秘方也

件常生延喜聖代與公忠朝臣同時相並事⁹²

合香之事者也⁹³

八條大將

宇治關白用此方

沈四兩一分

或二分

丁子二兩二分

甲香二兩

已上大

甘松一兩

熟鬱金一兩

已上小

大將者八条式部卿親王之孫也然則傳來方

可同承和方而有相誤甚可疑之⁹⁵⁹⁶

朱雀院

東三条院用之

91 甲香二兩 或本一兩 古 (次行「鬱金云々」の右側に小文字で補入)

92 神 ここに左記の朱筆有り相並事合香之事者也

93 事 古 鶴 杏 罌 奉

94 一分或二分 鶴 二分或二分

95 可 神 卍 鶴 卍 杏 可

96 可 鶴 卍 罌 卍 (頭注「可」)

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩

甘松一分三朱

藤麩一分三朱

已上97

17ウ

右方自天曆御時所令傳給也取煎蜜微火

以春篩占唐入蜜且煎且攪99合100之後入諸

搗香以匙調和先以目竿計搗香程調占

唐之蜜之程多於香少於香尤為拙101以能

均成爲巧合了搗三千六百杵畢取出作丸

斤量之後入瓷壺埋水邊得陽氣之地

藤原致忠

從四位上右馬頭 大納言元方男

18才

沈四兩二分 丁子二兩二分 甲香二兩

麝香一分 甘松一兩

藤原保昌

正四位下攝津守 致忠男

沈四兩 丁子二兩 甲香一兩 已上大

甘松一兩 鬱金一兩 占唐一分 已上小

右方父子相連如何103 104

小一條院

沈四兩二分 丁子二兩二分105 106 甲香一兩二分 已上大

熟鬱金二兩 甘松一兩 已上小

18ウ

97 小 鶴 無し

98 罫 ここに頭書「所」有り

99 罫 攪〇 (頭書「攪」)

100 古 鶴 罫 罫 ここに「了」有り

101 拙 罫 拵〇 (頭書「拙」)

102 下 鶴 無し

103 父子 羣 父字

104 連 神 連遊放 古 鶴 罫 罫 違

105 二 鶴 一

106 二 羣 三

右方雅忠朝臣注送之委見梅花方

山田尼

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩

熟麝金一分一朱

若無入甘松一分二朱

二條關白

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩

已上大

甘松一兩

治曆四年四月六日被合侍從一臍

¹⁰⁸

小

¹⁰⁹

香七兩

二分四朱

堀川右大臣

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩

甘松一分

此方殊芳若有秘說敷不注大小兩不審

參議師成

沈四兩二分

丁子二兩二分

甲香一兩二分

¹¹⁰ 已上大

熟麝金一兩

甘松一兩

以上小

大九兩四朱

或說占唐大一分又說麝金を停て麝香を

小二分加或黃麝金を用云々

107 二兩 杏 二兩三分

108 臍 神 臍 羣 濟

109 香 杏 岩 香。

110 已上大 鶴 杏 岩 無し

┌
19
ウ

┌
19
才

菊花 菊香にたるにほひにやあらん 111

不知誰人

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩二分

薰陸一分

麝香二分

甘松一分

清慎公云菊花方者長生久視之香也聞之

薰之者却老增壽枇杷左大臣習傳之亭子

院前裁合左方用菊花方右方用落葉方云

云我好此方常用之但麝香一分可令加進

之菊花盛開其香芬馥時析花置傍和合

之或人云舊干菊花一兩許加之云々水邊

菊下埋之經二七日許入瓷瓶 堅封口取出又經二七日

許用之若有急用者不用此說而已

落葉 113

不知誰人

沈四兩

丁子二兩

甲香一兩二分

薰陸一分

麝香二分

甘松一分

黒方115

又薰衣香此說誤歟

冬凍氷時深有其匂不被封塞116

閑院大臣

長良

清經

元名等同之

20 才

20 才

21 才

111 香 羣花

112 固 ここに左記「時經」方在り

時經

沈二兩 丁子二兩
貝三分 薰陸三朱
甘松三朱 麝香一分

113 固 鶴 固 固 ここに「秋のゆふくれ

しくれするほともみちのちりなとす

114 固 ここに左記「時經」方有り

時經

沈四兩二分 丁子二兩
貝三兩 麝香一分
白檀四朱 かうふし二分三朱
薰陸三朱 そかう二分

115 或鳥

或鳥

クロボウ

固 羣

或鳥

116 封 或鳥 固 羣 (傍注無し)

117 固

封耐

固

法封(頭書「封耐」)

118 大 頭書「得」「致」

118 大 神 六

或云至要方也延喜六年二月三日典侍滋

野直子朝臣所獻也

131 直子朝臣 杏 岩 チヨクシノ 直子朝臣

沈六兩 丁子三兩 白檀一分二朱

甲香一兩一分 麝香三分 薰陸一分三朱 已上

沈八兩 丁子三兩 麝香三兩 小

薰陸二兩 白檀二兩 甲香三兩

蘇合二兩 已上大 蜜五合 一 23 才

公忠朝臣

沈四兩 丁子二兩 少輕 甲香二分 少輕

132 固 鶴 杏 岩 ここに「或本」有り

薰陸一分 少輕 白檀一分 少輕 麝香二分

133 一 固 鶴 杏 岩 羣 三

上品香等頗輕可用意之若例香如兩數

大和常生

沈三兩 丁子一兩二分 甲香一兩一分

白檀一分 薰陸一分 麝香二分 一 23 ウ

八條大將

沈四兩二分 丁子二兩二分 甲香二兩二分

134 已上大 神 無し

麝香二分 白檀二分 薰陸一分 133 已上大

¹³⁵ 可疑之由委見侍從

135 可疑之由委見侍從 固 朱筆、小文字

朱雀院 東三条院同之

沈四兩二分 薰陸一分 白檀一分

丁子二兩 甲香一分 麝香一分四分 已上 小 24 才

藤原國勢 從五位下前出羽守

沈四兩 丁子二兩 甲香一兩二分 或大 二分

麝香二分 白檀二分 薰陸二分 已上大

沈四兩二分 丁子一兩二分 甲香一兩二分 已上大

白檀二兩 小 薰陸二兩 小 麝香一分 大

大一兩三朱 小三兩一分三朱 小一兩三朱

大二分 小六分 大一朱半 小四朱半 24 寸

136 ↓ 右二方尤香云、六物各細搗以練篩之137性138兩

數斤定之後139和合撥合五六十度許訖即合

篩二度亦推140各分兩斤定了以蜜入土器中

堽埋炭火居其上微、煎之沫立之後以綿曳141

取沫以指深蜜非暖142非寒欲誤冷也先以六種

香入大革管蓋和蜜能黏合了入鐵臼搗

千杵取出入瓷蓋不至口八分許能封其口 25 才

掘窟中土144二尺許埋之春夏三日秋冬五日也

136

固罨 押紙 今之通用、一斤四拾目、一兩拾目、一分或匆五分、一朱四分餘、

- 137 緜 罨 繡
- 138 任 罨 住
- 139 和 罨 無し
- 140 推 罨 推。
- 141 曳 罨 (頭書「曳」)
- 142 暖 罨 暖
- 143 誤 罨 (無し) 罨 誤。
- 144 土 罨 罨 云

觀教大僧都 延曆寺 公忠弁息 三条院御持僧

沈四兩 丁子二兩 甲香三分 26ウ

白檀三分 薰陸二分 麝香一分

藤原知章 正四位下春宮亮 関院贈太政大臣傳也分朱有後用心 157

沈四兩 丁子二兩 甲香一兩二分

麝香二分 白檀二分 薰陸二分 已上大

已上成粉員 158 蜜三合許可入

藤原保昌 沈四兩 丁子二兩 白檀一分 27才

甲香一兩 麝香二分 薰陸一分 已上大

沈六兩 丁子三兩 白檀一分二朱

甲香一兩二分 麝香三分 薰陸一分 已上小

山田尼

沈四兩 丁子二兩 麝香二分

甲香一兩二分 薰陸一分 白檀一分

尼のいはく、るほうにハ麝香をすゝめたる
いとかうはし 159 27ウ

二條關白

157後 固 (欠) 鶴後 固 (無し)

罌 線

158員蜜 固 (欠) 杏 罌 員○蜜 罌 員蜜

159かうはし 罌 よし

202

↓ 増損化慶寺

麝香一朱 已上大

沈一斤

薰陸二両

香附子二分

甲香一両

丁子一両

零陵香二分

藿香二分

艾納二両

麝香二分

蘇合三両

已上小

205 204
麝衣香 或注薰衣香

205
邠王家

零陵七両

沈二両

丁子二両

蘇合二両

占唐二両

藿香三両

麝金一両

麝香二両

右八種各別搗為散和合但蘇合占唐以手

按碎和之

承和百步香

此方出自四條大納言家大江千古所上耳

甲香八両

蘇合一斤

占唐一斤

白檀八両

零陵八両

藿香四両

甘松花四両

乳頭香五両

白膠二両二分

麝香四両

麝金二両二分

已上小

1 32 ウ

1 32 才

201 慶

神 慶 古 鶴 杏 罌 度

目録度 (非ナルヘシ) (欠)

202 「増損化慶寺」二方中前者の方無し

鶴 有り 増損化慶寺 大

沈一斤 薰陸二両 香附子二分

甲香二両 丁子一両 零陵香二分

麝香一朱 已上

杏 有り (但し名称「増・化慶寺」の記載は前者の一度のみ)

増損化慶寺

沈一斤、薰陸二両、香附子二分、甲香一両、丁子一両

、零陵香二分、麝香一朱

罌 有り (〃)

増損化慶寺

沈一斤、薰陸二両、香附子二分、甲香一両、丁子一両

、零陵香一分、射香一朱

203 艾 神 艾 固 艾 鶴 艾

杏 罌 麝 艾

204 麝衣香

神 麝衣香

古 衰衣香 鶴 衰衣香 罌 衰衣香

按表玉篇云於踰切衰也代字麝云香與レ衣也

205 邠王家

神 邠王家 杏 邠生家 罌 邠生家

麝 邠王家

206 出 杏 罌 無し

207 膠

神 白膠 杏 罌 罌 膠

機香脂也

212

化慶寺百和香

給百和香方也

六稱黒方は誤歟
亦名侍從

沈四両

丁子二両

甲香一両

已上大

熟藨金一両

甘松一両 已上少

寛平六年九月十日八条一品宮於御前寫

33ウ

沈六斤

代沈底

薰陸二斤

甲香七両

香附子三両

丁子二両

零陵四両

藿香二両

艾納一両

麝香三両

代青木香

代白檀

蘇合七両

或三両

蜜一斗

以上小斤

右十種末之蜜去沫令冷淨漉和搗千杵蜜

34才

封蓋之彼是用之

七日後即成

甲香一分

蘇合二分

占唐二分

白檀二分

零陵一分

藿香三朱

甘松三朱

乳頭四朱半

白膠二朱

麝香三朱

藨金二朱半

已上為試四分之一所分出也

右十一種搗篩蜜和之於瓷器中盛埋經

三七日取燒百歩之外聞香

百和香

208 膠

209 試

固

減

固

減

固

減

固

減

210

右十一種搗篩蜜和之於瓷器中盛埋經
三七日取燒百歩之外聞香有り
固 無し

211

六 固 固 固 固 固 亦

212

以下の記事欠、代わりに他本に無い「會昌薰衣香方」「薰衣香方」「又方」「元弘云々」(頭書)有り

會昌薰衣香方

元弘二年 せんかう大三両 かいかう大二両
三月十七日 せんかう大三両 かいかう大二両
少 兼合之 丁子大一両 うこん四かん
其香丸勝之 せんかうをのく三朱 白し大一朱
勝先年合之珠 さかうをのく三朱 白し大一朱
殊秘方也 ちん大一両二分

天慶六年十一月十一日公忠朝臣所進

又のほうに

・ちん二両一分 丁子二分
かい一両一分 うこん三朱 可兼
白たん二分 そかう一両三朱

せんたう一分 しやう木かう二分
そかう一両までそりくたきてあハす

あまうにあハすことせんすかうの二所ミテ
このほう少々世のさハかしきころもち

あるにハなハたよし又これを多
くするにあしきかせてたつ時そ

もちあるへき也

薰衣香方

・沈香十五両 甲香九両 藨金二両
丁香三両 白膠香二両 藨陸一両
蘇合二両 藨唐香二両 藨金香三両

麝香二両

令人躑香

甘草

瓜子 218

大棗 219

已上分等末²²⁰服方寸匕三也百日衣服甚

浴湯香

茵荷香一兩

零陵一兩

茅香一兩

甘松一兩

右以水作湯治之任意量多少以足為限

或本加澤蘭一兩

落梅公主潤面膏方

新雕經驗藥方云

酥一斤貞者於銀器

鵝梨汁 少許

梅鹽花 一兩研

內²²⁸大並成油用

馬牙消一兩

柳汁 少許

右件藥與諸般都入酥內用東南嫩柳枝

子七莖長七寸用生緋線²³¹遂寸札將此枝子

早晨²³²面自東吸²³³氣噴在酥內將一莖枝

子²³⁴右²³⁵懷二十七轉其柳枝子頭微黃色用刀

子於線上截却如此法七莖柳枝子直候

使盡為度此膏以成用淨合子盛貯以代

面油使用

丹陽公主甲煎方

或蔡尼字敷

沈香六兩

丁香四兩

風香膏二兩

一或見本

35ウ

35才

34ウ

入方

右鹿搗如麻豆蜜和油袋盛瓷瓶中盛七日取用

沈香九兩 白檀十二朱

甲香九兩 麝香十二朱

白膠香一兩 甘松香一兩

蘇合香一兩 薰陸半兩

日搗²²⁶之若

213慶

神^{目錄度}固(欠)鶴^{非ナルヘシ}杏^度固^度

214艾

神艾固(欠)鶴艾^度杏固艾^度羣艾

215液

神液^最固(欠)鶴^度液

216蝎

神蝎^最固(欠)杏^度鶴^度固^度羣^度

217蓋

神蓋^最固(欠)鶴^度杏^度固^度蓋^度羣^度

218依

依^瓜固(欠)杏^度羣^度瓜

219棗

固(欠)鶴^{棗敷}素^{棗敷}杏^{棗敷}固^{棗敷}素^{棗敷}

220冷服

固(欠)杏^度固^度冷服

221首

固(欠)固^首首^首荷

222治

固(欠)鶴^最固^最羣^最浴

223或

固(欠)鶴^最固^最

224澤蘭

神澤一蘭固(欠)

供養香

沈九兩

丁子二兩

蘇合一兩

代甘松

薰陸一兩

白檀一兩

茅香二兩

麝香二分

兩錢重
代黃麝金

右香細搗着蜜和供入鐵臼搗五百杵如彈

丸供養如來

天寶七載六月師主景尊干時在茅山太平

觀記之十二載八月寫取日本國使永生府

兵曹參羊崔叡祐²⁵⁷

金剛頂經香

沈半斤

蘇合半斤

薰陸半兩

白檀半斤

安息半斤

丁香四兩

龍腦一兩

右七味搗篩用蜀乾糖及濕砂糖和之合調²⁵⁸

更入白中搗一千此方出西方是大悲尊吉²⁵⁹

說

觀世音菩薩留濕香²⁶⁰

傳在化慶寺此方是洛京僧録弟子崇知大師²⁶¹

傳與沈香六斤薰陸二斤甲香七兩零菱香

249 棟紅包看

神 棟二紅包看^{エラフ 色者歟} 固 (欠)

麝 棟尺と者 固 棟紅色看

固 棟紅色者

250 唐

固 (欠) 麝 固 麝

251 土

固 (欠) 麝 云

252 乙

神 亦 固 (欠) 麝 と 固 固

253 固

固 (欠) 麝 (頭書「ら」) 麝 固 固

254 固

神 無し 固 (欠)

255 固

固 (欠) 固 燭 固 燭 (頭書「燭」)

256 内

固 (欠) 固 内

257 穀

神 穀 固 (欠) 固 穀 麝 穀

258 濕

固 (欠) 固 濕 (頭書「濕」)

259 千

固 (欠) 固 千

260 濕

固 (欠) 固 濕 (頭書「濕」)

261 千

固 (欠) 固 千

266 265 264

裏面共梗合了

262 再麝香各四両 藿香三両 丁香七両 艾納二両 白
龍腦一両分²⁶³ 如本 両審湏記

刑部卿範兼卿奉 勅抄集之也

40
ウ

40
オ

260 濕

固 (欠) 羣 滋

261 慶

神 目錄度 慶 固 (欠)

鶴 杏 罌 羣 度 (非ナルヘシ)

262 再 固 (欠) 鶴 杏 罌 羣 一両

263 分^{如本} 兩

神 分 兩 固 (欠)

鶴 分兩 (一字空き無し)

杏 罌 分兩

羣 分 兩 (一字空き有り)

264 裏面共梗合了

神 裏面共梗合了^{ウラオモテ 校了}

固 (欠)

鶴 裏面共校合

杏 罌 裏面共梗合了

265 神 ここに「按原本卷物ニテ表裏ニ書アリシナルヘシ」有り

266 上下巻ともに裏書記載無し

神 上下間ともに裏書記載無し

古 上巻中に一部有り 書入れ

鶴 杏 罌 ここから上巻裏書有り

羣 上下巻裏書共に下巻末に一括

薰集類抄下

和合時節 煎甘葛

炮甲香 春香

篩絹 篩後斤定

合篩 和香次第

合和 合春

埋日數 諸香

和合時節

賀陽宮

正月十日作之

山田尼

春むめのはなさかり二三月秋蘭菊

のかうはしき八九月

煎甘葛

姚家 取白□蜜一斤四了煎沫解即取和香

長寧公主 蜜去沫和

270 郝王家 以蜜合占唐香微々火煎

賀陽宮 蜜能煎捨沫用之

公忠朝臣

276 以文武火煎記去沫整寒温和雜香又曰

277 蜜能煎煎未固程ニ以綿テ絞テ可合之

280 白石英方云煮以陰陽鼎煎以文武火出於

42 才

41 ウ

41 才

267 付埋所 岩「埋所」無し

268 □(虫損) 鶴 羣 神 汝

香 米。 岩 法。(頭書「米」)

269 取 鶴 焚 乳 香 岩 焚 乳。

270 雀王家 鶴 創王家 本ノミ

杏岩 卯王家 神 卯王家

271 唐 神 鹿

272 杏岩 ここに「去」有り

273 記 鶴 岩 羣 訖 杏 訖

274 整 鶴 勢 神 勢

275 靴 鶴 杏 誰 岩 誰 羣 雞

276 蜜 鶴 本ノミ 杏岩 等

277 能程 神 能程ニ

278 未固 杏岩 未固

279 以綿テ 鶴 杏 岩 以綿テ

280 「本草也」有り 羣 無し

281 鑄 神 錢

282 蚤 岩 蚕 羣 猛

283 仲 鶴 杏 岩 羣 件 神 仲

284 仲 鶴 杏 岩 羣 件 神 仲

285 小 羣 者 小 神 者

音度 卯王家 本ノミ



勢

草木為文火於金石為武火春夏鑄為陽
鼎秋冬鑄為陰鼎²⁸¹

或書云下猛火上以灰埋也下猛則武也

上埋則文也謂之文武火也

經信卿云非²⁸²非微以之為文武火也以微

火為文以猛火為武也仲卿公忠之末流也

若有所聞歟但非微者已離文非猛者亦

離武何以中火稱文武乎

師成卿云先以猛火煎後以微火煎謂

之文武火也仲卿小一條大將之孫也

定有所聞歟²⁸⁶

雅忠朝臣勘文云文伏武之道也政理

和則武道不興故煎練之處以²⁸⁸燒為

文武火歟

²⁸⁹ 於刀反 東官切韻云埋灰中冷熱也唐

²⁹⁰ 火²⁹¹ 韻云伏埋²⁹²燒煨也去物漸熱也無焰火也

又云陰陽釜秋冬鑄為陰春夏鑄為²⁹⁶

陽或隨所出定陰陽以北方為陰以南方

為陽歟凡煮藥其釜覆蓋謂之陰²⁹⁸如本

陽鼎居²⁹⁹并覆蓋以之陰陽鼎

八条官 凡蜜煎去沫 蔗唐蘇合等入蜜煎

八条大將 以甘葛入瓶子封口入湯三日許煎之如蜂蜜

286 開神^開

287 練羣煉神^練

288 處羣^處神^處

289 鶴^{ここに頭書}「煨於刀反」

290 煨^煨罍^煨

291 埋神^埋

291 糖煨^糖罍^糖

293 去^去罍^去

294 熱^熱罍^熱神^熱

295 焰^焰神^焰

296 為^為罍^為

297 北^北神^北

298 凡煮藥其釜覆蓋謂之陰陽鼎^{如本}

299 凡煮藥其釜覆蓋謂之陰陽鼎^{如本}

300 隨^隨罍^隨神^隨

301 千歲蔓汁^{甘葛也}罍^{千歲蔓汁}

300 隨時朝臣 和合蜜與千歲蔓甘葛也汁混合用之
 302 國務 以蜜入土器中燒埋火居其上微火煎之沫立之
 後去沫以指探蜜適寒温欲冷也熱則失香云云

山田尼

蜜はかうはしけれとむしのいてくるとき
 あり³⁰⁷あま³⁰⁵つらハよし³⁰⁶かなくさ³⁰⁴からすさ³⁰⁸かくさ
 からす³⁰⁷ねる蜜のことく³⁰⁹かた³⁰⁹からむ³⁰⁸を火よく
 うつ³⁰⁷ミてしろ³⁰⁹かね³⁰⁹のものして煎せよ火の
 きハ三寸はかりもち³¹⁰あけよ³¹⁰かなわ³¹⁰をたて、
 きえぬものから³¹¹にふ³¹¹くてねる³¹¹なりいれもの
 のつら³¹²につきたる³¹²をハし³¹²にかくれ³¹³ハいと
 たる³¹⁴ほとに煎せよか³¹⁴たま³¹⁴らぬ³¹⁴さ³¹⁴きに上³¹⁴て
 さ³¹⁵ましてもの³¹⁵にした³¹⁵ミ³¹⁵い³¹⁵れてか³¹⁶ひ³¹⁶して
 す³¹⁷こし³¹⁷つゝ³¹⁷く³¹⁷みてか³¹⁸つゝ³¹⁸ま³¹⁸め³¹⁸してか³¹⁸た³¹⁸き
 か³¹⁹た³¹⁹なる³¹⁹につ³¹⁹き³¹⁹も³¹⁹てい³²⁰け³²⁰は³²⁰よ³²⁰き³²⁰

或説
 322 あまつらを煎することほものしてかき
 323 あくれは³²⁴や³²⁴ます³²⁴け³²⁴の³²⁵や³²⁵へ³²⁵た³²⁵ゝ³²⁵み³²⁵の³²⁵や³²⁵う³²⁵に
 327 たゝ³²⁷な³²⁷はり³²⁷ゐ³²⁷る³²⁷ほ³²⁷と³²⁷に煎³²⁷す³²⁷へ³²⁷き³²⁷なり³²⁷火³²⁷を
 328 う³²⁸つ³²⁸み³²⁸て³²⁸か³²⁸な³²⁸わ³²⁸の³²⁸う³²⁸へ³²⁸に³²⁸す³²⁸へ³²⁸て³²⁸煎³²⁸す³²⁸へ
 329

330 331 炮甲香 きなり

45 オ

44 ウ

44 オ

302 國神上卷二轉 國神

303 蜜神蜜

304 とむしのいてくる虫 出 来

羶 とむしのいてくる虫 出 来

神 とむしのいてくる虫 出 来

305 あまつら 香罍 あまかつら

罍 あまつら甘葛煎 神 あまつら

306 かなくさからすさかくさ

羶 かなくさからすさかくさ鉄 臭 酒 理

神 かなくさからすさかくさ鉄 臭 酒 臭

307 すねる 罍 香罍 ぬか

神 すねりねる 煎

308 火よく 罍 火より 神 火子 煎 上く

309 ものして 罍 ものにて

罍 器して 神 ものして

310 かなわ 罍 かなわ 神鉄 輪 かなわ

311 にふくて 罍 に、ふくて 神 にふくて

312 をハしに 罍 罍 を、はしに

罍 ハはし 神 をハしに

姚家

理甲香取甲用水刷洗着ナ子ナ中用古酒332 醉333也

一升煎334五沸盡酒為度更洗如前了用酢335

煎盡酒為度亦用水洗如前和小許蜜熬336

令黄包云々337

唐僧長秀

浸煨水經三日夜淨洗炮了又塗蜜重炮干

取春

賀陽宮

甲香漬酒而一宿其後爆338火搗之

八條宮

今日午時漬酒明日同時取上340干調之339

典侍直子朝臣

漬酒一宿後刷取後漬342醉後亦洗水云343 今只漬酒一宿後刷洗曝干塗蜜又344于

令黒黄

公忠朝臣

先漬古酒經一宿割去肉膜灸大唐及土左

國經二宿云々炮345塗蜜及黒黄于取搗345任用

隨時朝臣346

漬酒經一宿以清水洗和千歲蔓汁滴灸待347

一字下下

46 ウ

46 オ

45 ウ

310 いとたるほと神いとたるほと神

314 上神て神よく

315 も神の神もの神もの神

316 か神ひ神か神ひ神か神ひ神

317 く神み神く神み神く神み神

318 ま神め神杏神岩神ま神め神杏神岩神ま神め神

319 つ神き神も神て神杏神つ神き神し神て神 持

320 い神け神杏神岩神い神る神 行

321 よ神き神岩神よ神き神 神

322 あ神ま神つ神ら神 あ神ま神つ神ら神

323 あ神くれ神は神 あ神くれ神は神

324 や神ま神す神け神 杏神 や神ま神す神け神

325 や神へ神た神み神 八神重神 結神 や神へ神た神み神

326 た神な神は神り神 た神な神は神り神

327 ほ神と神に神煎神す神 ほ神と神に神煎神す神

328 う神つ神み神て神 八神重神 結神 う神つ神み神て神

329 かな神わ神 かな神わ神

330 炮神杏神 炮神岩神 煙神 神神 ○神炮神

國轉

朝搗用今試一度以千歲蔓汁代蜜但推
尋其意依³⁵⁰廢非好盖相轉用乎³⁵¹

擇厚深物漬美酒寒時經一宿温時朝漬夕
出也漬拭不削刷矣³⁵²唯觸³⁵³剝膜肉以蜜塗之
以帟籠炮乾亦塗蜜³⁵⁴如此三度了取見其中
待黃脆折時取春之³⁵⁵

東三条院

漬好酒經一宿之後以刀上³⁵⁷乃垢³⁵⁸ヲ剝落重³⁵⁹テ
于離³⁶¹ウ炮³⁶²ヌト知³⁶³ル

四条大納言

塗甘葛煎若濃³⁶⁴ハ水ニテ頗薄ク成³⁶⁵テ可塗之
濃甘葛煎³⁶⁶ヲ塗³⁶⁷ハ甘葛煎³⁶⁸テ早不被灸也³⁶⁸

只薄ク塗カ吉也

山田尼

よきさけにひとよひたしてきたなきと
ころなくよくはた³⁷⁰けてあまつらの煎せぬ
を名なしのゆひしてぬりて火をよくおこし
てかき³⁷¹ひろけては³⁷²ひかきうつみてこの

47
ウ

47
才

331 甲香 神 甲香カヒカウ

332 鐵子 鶴 鐵子テツコ

杏岩 羣 鑄子 神 鐵子テツコ

333 酒 羣 醉サケ

334 羣 杏岩 羣 三三有リ

335 亦 杏岩 忽 神 名ナ

336 熬 神 熬アウ

337 包 杏岩 羣 色

338 爆 羣 曝 神 爆ハク

339 同 神 同ドウ

340 多 鶴 灸 杏 灸 岩 灸 羣 灸 神 灸

341 一宿後 羣 一夜後

342 亦 杏岩 忽 神 名ナ

343 蚕 鶴 灸 杏 灸 岩 灸 羣 灸 神 灸

344 于令黑黃 岩 干黑黃カニク

345 佞用 羣 佞由 杏 任用 岩 任由

羣 任用 神 伎用

346 隨時 羣 杏岩 隨時 羣 隨時

347 千歲 羣 汁 羣 千歲 羣 汁

杏岩 羣 千歲 羣 汁 神 千歲 羣 汁

348 滴灸 羣 滴灸 杏岩 滴灸 羣 滴灸

めのこまかなるにひろけいれて三日はかり
あふれあつきはをしわりてあふるへし
こかさぬものからよくこかねいろにあふれ
うすくてひろきハとくあふるあつきを
よくあふりたるもよし

又云

ひろくてうすきをよきにすあつきをも
いふまつあちはひよくすみたるさげに
ひたしてけふの午時にいれたらハあすの
午時にとりいつへしもろこしのかひかう土佐の
くに、いてくるとはふたよひたすへしかた
なしてうちのかたにつきたるたなしといふ
ものをよくハたくへしうらのいそすりハた、
ものなとのはさまりたらんをはたけていた
くはハたくましうらもうへもよくハたけ
きさけたるもよしといふ人もありされとも
それはわろきなりさて水してよくあらい
て又ときすにひたしてしハしおきて又
とりいて、水してよくあらふへした、し
すにひたすことはあまりの心しらひなり
さらねともあしくもあらずさてよくのこひ
ほしてこきかミをしきて火をよくきほとに

49
ウ

49
オ

48
ウ

48
オ

349 千歳薑汁 鶴 杏 岩 千歳薑汁

350 其 鶴 甚 神 甚 其 甚

351 傳 杏 輔 岩 博 (頭書「輔」) 羣 轉
神 傳

352 矣 鶴 兵 神 矣 兵

353 割 鶴 杏 岩 割 神 割 神

354 亦 杏 岩 忽 神 名 亦

355 蜜 如本 鶴 岩 如本 杏 岩 羣 神 蜜

356 脆 鶴 曉 岩 脂 (頭書「脆」)

357 次 鶴 杏 岩 夜 羣 宿 神 夜 宿

358 上 乃 鶴 岩 上 乃 杏 上 三 神 上 乃

359 垢 乃 神 垢 乃

360 割 鶴 杏 岩 割 羣 削 神 割 削 神

361 千 鶴 岩 羣 干 神 乃 神

362 離 乃 鶴 離 乃 杏 離 乃 羣 離 乃

363 炮 又 神 杏 岩 炮 又 神 炮 又 神

364 水 二 神 鶴 水 神 杏 岩 水 神 水 二 神

365 成 神 羣 成 神 成 神

366 塗 神 羣 塗 神 塗 神

367 煎 神 鶴 羣 神 煎 浦 神 杏 岩 煎 桶 神

してうるへくよくからくとなるまでつ
 ねにかへしつゝたかさねてあふりてのちに
³⁹⁸せんしたるあまつらぬりてあつくふくむま
 しきかみをこのうへにはりてハたによくとち
 つけてまつらるうへにてあふるへしうち
 をうへにてあふることほくほなるかたにいり
 たるあまつらをこほしとてなりそのあま
 つらすこしかはかむのちにはうらをうへにて
 もあふるへしおしをふにしふねからぬ
 やはらかにおれてくるミすきはやかなるほ
 とにあふりてつくへしもししめりてつ
 かれすふるはれすは火をよくほとにてあ
⁴²³ふりかはらけつらふるへしある説にはせ
 んしたるあまつらしてあふるハあふる
 まゝにこかれてあしたせんせぬをぬりてあふる
⁴²⁸へしとそいふをなましあまつらハとみにあふ
⁴³³りかはらけられすいそかむときハせんしたる
⁴³⁶をぬるへきにやあらむあふるときにいえつ
 きてあるをはとりかへさむとてハ火をあつ
⁴⁴¹きほとにてすこしあふりてはなつへし
 おほよそあまつらのおほくつきたるかよき
 なり

— 50 才

— 51 才

- 369 ひ神 九ひ
 368 蚕 鶴 灸 香 灸 岩 灸 羣 灸 神 灸 灸
 370 はたけて 神 はたけて
 371 ひろけて 神 ひろけて
 372 はひかき 岩 はひよに(頭書「籠」)
 373 き 鶴 よま
 374 と 鶴 を 神 さよ
 375 あふるる 神 あふるる
 376 を 鶴 香 岩 と 羣 灸
 377 よく 岩 よく
 378 さけ 神 さけ
 379 かひかう 神 かひかう
 380 ふたよひたす 神 ふたよひたす
 381 たなし 鶴 香 たなしこ 岩 たなしこ
 382 ハたく 鶴 はたく 香 はたく
 383 をはたけて 香 岩 を、はたけて
 384 いたくはたくまし
 神 羣 岩 いたくはたくまし
 神 香 いたくはたくまし
 神 加 いたくはたくまし
 神 いたくはたくまし

春香

444 邪王家

445 裏衣香方六種各別擣為散和合唯蘇合⁴⁴⁶麝

唐以手按碎和亦好⁴⁴⁷

案之雖梅花烏方⁴⁴⁸可准知敷

449 姚家

零陵香乾曝淨打却去搗甘松且乾曝去塵霍

香亦同此外餘者盡搗可即入袋⁴⁵⁰ 云云⁴⁵¹

公忠朝臣

薰陵○甘松⁴⁵²漸春 凡春香替時鐵臼⁴⁵³ヲ可能拭

大和常生⁴⁵⁴ナリ

十五歳許ノ女ノ粉張⁴⁵⁵乃衣ヲ着シテ春ムニ其粉不

落ル程ニ可春

案之微、可春敷

國勢

可傳諸方説細搗⁴⁵⁶ 云云

四条大納言

荒キハ其香ト聞也細搗⁴⁵⁷篩ヒタル只薰物⁴⁵⁸乃善惡

トコソ聞⁴⁵⁹由水沈丁子ト聞ユル事ハ無し然則篩ハ猶二重

許ニテ可用

52 ウ

52 オ

51 ウ

385 うら 羣^{ウチ}

386 ハたけ 神^{ハたけ}

387 ありされとも 羣^{ありされとも}

388 ありされとも 神^{ありされとも}

389 わろき 神^{わろき}

390 あらい 羣^{あらい}

391 ときす 羣^{ときす}

392 とん 羣^{とん}

393 のこひ 神^{のこひ}

394 こき 羣^{こき}

395 よくきほとに 羣^{よきほとに}

396 かへし 神^{かへし}

397 たかさねて 羣^{たかさねて}

398 こかさねて 羣^{またかさねて}

399 せんし 神^{せんし}

400 ぬりて 神^{ぬりて}

401 ふくむましき 羣^{ふくむ、しき}

402 ふくむましき 神^{ふくむましき}

知章朝臣

甲香塗蜜ヲ炮テ折見ニ中きはやかになりて
さわらかなる時可春

山田尼

463 ↓
甲香ハ炙ツ、可春シ←461ねちけたれば462
宇治関白

465 ↓
麿香ハ鐵小鉢同鎚シテ研之
篩絹

公忠朝臣

466
以産羅篩

國驍

467
所傳請方黒方細搗以産篩之468

四条大納言

篩擣二重ニテ可細篩也以細為勝469

知章朝臣

470
以産可篩之

山田尼

ふるひハかとり471の小葉をはりてはしめハゆすりてのち472
はやおらつ474すれ475あら476すれハ477あら478し479あまり480細かなるハ481
478
みめハよくてたく479をり480にふく481れて482いとくかへ483しかに484
なり485あらく486したるハ487みめ488わろく489ては490ふれ491か492まし493よ494き495オ496

53
ウ

53
オ

- 418 もし **神** もし。
- 417 つく **神** つく春
- 416 415 414 413 412 411 410 409 408 407 406 405 404 403 402 401
 - くろみすき416すきは417やか418か419
 - くろみすき420すきは421やか422か423
 - くろみすき424すきは425やか426か427
 - くろみすき428すきは429やか430か431
 - しよ432ね433 **鶴** しよ434ね435
 - から436ぬ437 **羣** から438す439 **神** から440ぬ441 442
 - お443れて **羣** を444れ445く **神** お446れて447
 - お448し449を450ふ451に **鶴** **杏** **岩** お452し453を454る455に456
 - お457し458を459ふ460に **鶴** **杏** **岩** お461し462を463る464に465
 - お466し467を468ふ469に **神** お470し471を472る473に474
 - その **神** 475 **石** 476 477
 - いり **神** 478 **り** 479 480
 - く481ほ482 **神** 483 く484ほ485
 - あ486ふる **神** 487 あ488ふる
 - うち **鶴** **杏** **岩** 489 うち **羣** 490 うち
 - あ491ふる **神** 492 あ493ふる
 - あ494ふる **羣** 495 あ496ふる **神** 497 あ498ふる
 - う499ら **羣** 500 う501ら **神** 502 う503ら
 - と504ち **神** 505 と506ち
 - ハ507た **神** 508 ハ509た
 - は510り **岩** 511 は512り

ほとなるそよきくさくふるひあつめてひとつに
 いるゝおりかうはしきものははてにいるちむをかき
 ひろけて又あはせつきせよ篩はあたらしかるへし
 497 492 493 494 495 496 497 498 499
 ませて又あはせつきせよ篩はあたらしかるへし
 あかきところにてよくみよつきたるものゝなかに
 497 498 499
 らすかミのふくれおるかみなどのいりたるを又ふるい
 てみるなり

二條關白

篩者合篩打張薄物に篩ニハ薄キ八丈絹ヲ張ル

篩後斤定

四條大納言

各香擣篩乃整懸兩分之間薄昏以テ裏各香ヲ
 507 508 509 510 511
 置斤盤ヲ懸定ナリ仲昏ノ名ヲ葦昏ト云其紙乃
 512 513 514 515 516 517
 葦中ニ如紙ナル物アリ如彼ノ昏也近来更不見者
 518 519 520 521

知章

惣各春篩又可斤定 522

合篩

公忠朝臣

先搗諸香作散和合後以産羅篩之号曰合篩又云以産紗篩
 523 524 525 526

國莚

各細搗以産篩之任各兩數斤定後和合撥

55 才

54 ウ

- 419 つかれす 神 つかれす
- 420 ふるはれすは 羣 ふるはれすハ
神 はれすは。
- 421 よく 羣 神 よき
- 422 あふり 神 あふり
- 423 かはらけ 羣 かはらけ 神 かはらけ
- 424 つら 羣 羣 つ、香 つ、罫 (無し)
神 つッ
- 425 せんしたる 神 せんしたる
- 426 あまつら 神 あまつら
- 427 あふる 神 あふる
- 428 こかれて 神 こかれて
焦
- 429 あし 神 あし。
悪
- 430 たゝ 神 たゝ
- 431 せんせぬ 香 せんをぬ 神 せんせぬ
煎
- 432 あふる 神 あふる
- 433 とそ 神 とそ
- 434 いふ 神 いふを
きれ
- 435 なまし 羣 なましき 神 なましきれ
- 436 かはらけ 羣 かはらけ 神 かはらけ
- 437 られす 香 罫 られす、神 られす。
- 438 せんし 神 せんし

合也但麝香ハ最後合之 ← 539

小一条皇后

先沈丁子ヲ合次甲香ヲ合次白檀ヲ合終ニ麝香薰陸ヲ合テ一度ニ合スト云リ少ヨリ多ニ可及快ヲ為合也 540

合和

和以泯543為好

泯唐韻544三弥忍反弥賓反滅也又動也

知章朝臣口傳云以指推合香549ニ指乃550皴551乃552文乃付ク程ヲ泯々ノ程ト謂也

國驛

和蜜程頗欲堅埋則自有温氣云云

大僧都寛教

春之丁子夏秋之沈冬薰陸随季三朱許可加敷

山田尼

先つめをきりて手555をあらひてつかミあはせ556よこれはことねり常生か説なりてのあか557

いるとてもちるぬ人もあり又云560いまたか

たまらぬによく561さましてもものにしたみ

いれてか562ひしてすこしつゝくみてか563つ

まめしてかたきかたなるにつ564きもてい565け

諸

57 オ

57 ウ

58 オ

458 由水禮ゆれ禮香禮由れ禮罌禮罌禮由礼

神由本

459 無し禮罌禮罌禮無禮神禮無し

460 炙礼ツ、可春礼シ罌礼罌礼炙礼ツ、可春礼レ之礼シ

神炙炙礼ツ、可春礼シ

461 罌礼罌礼ここに「之」有り

462 罌礼罌礼ここに「本」有り

463 罌礼罌礼罌礼ここに「又云金白杵ハ香替ユトニ清掃ヘ」有り

464 鐵小鉢乃罌礼鐵ノ小鉢乃神乃鐵小鉢乃

465 罌礼罌礼ここに左記の二行有り

二条関白 麝香ハ、瓷杯ニ入テ銚レ之

466 以度羅羅乃罌礼罌礼以三麻羅乃罌礼罌礼

罌礼罌礼以鹿羅羅乃神乃以鹿羅羅乃

467 請罌礼罌礼請罌礼罌礼

468 以緇節乃罌礼罌礼以レテ節乃レ之乃

罌礼罌礼以節乃之乃神乃以節乃之乃

罌礼罌礼以緇乃可節乃之乃

469 可細節也乃以細乃為勝乃

罌礼罌礼可乃三細乃節乃也、以細乃為勝乃

罌礼罌礼可細節也、以細乃為勝乃

470 以緇乃可節乃之乃

罌礼罌礼以緇乃可節乃レ之乃

罌礼罌礼以緇乃可節乃之乃神乃以緇乃可節乃之乃

471 かと乃り神乃かと乃り

536

合五六度許訖則合篩二度
529
和合次第

賀陽宮

黒方 沈一甲二麿三薫四白五丁六
531

滋宰相

先和沈丁子次合甲香次合白檀最後和麿香

云々 尚自可及多爲令快和合也
532

染殿宮

諸香合蜜之後可和麿也 此說可秘云云

公忠朝臣

沈ヲ母ニテ 沈丁薫白ノアハヒニ 麿香ハ合次甲香
534

又說蜜合了之上麿香振懸云々蜜合了以

手ニキル也加手成之普一々振合為能
536

八条大將 承和秘方同之

沈甲麿薫白丁

朱雀院

沈丁甲薫麿
537

東三條院

沈甲白薫丁麿

四條大納言

合香次第只以兩數少物先入也又以兩數均對
538

云々

55
ウ

56
オ

56
ウ

439 さらむ 鶴 あらん 杏 岩 あらん、

神 あらむ

440 いえ 杏 岩 八、え 羣 にえ

神 いえ

441 をは 神 をは

442 神 左記の書き入れ有り
はなつへし
ニエツキタルヲハナツナリ

443 たる 神 たる

444 卯王家 鶴 卯王家 杏 岩 卯王家

羣 卯王家 神 卯王家

445 裏衣香 鶴 裏衣香 羣 裏衣香

446 藤唐 杏 岩 藤唐、 羣 莞唐 神 藤唐

447 亦 鶴 之 神 亦

448 烏方 神 烏方

449 姚家 神 姚家

450 亦 神 亦

451 外 鶴 杏 岩 列 神 外

452 生 杏 岩 羣 生 神 生

453 許ノ 神 許ノ

454 張乃 鶴 張ノ 杏 岩 張ノ 神 張

455 諸 岩 諸 (頭書「諸」) 神 諸

456 搗篩ヒタル 鶴 杏 岩 搗篩ヒタルハ

457 乃 鶴 杏 岩 神 乃

乃 鶴 杏 岩 神 乃

はよき煎したるものなからいるれば
たりくるほどにいれすくすなり
566

或説

すりのはこのふたな~~に~~にあつくうるは
しきかみをしきてそれに香をしたいに
いれてまつひとくさいれてははまくりの
かひなとしてよくたひくかきかへしつゝ
あまねくあはせて又いれくよくかき
575

60 オ

あはせてすこしあらきふるひしてふた
たひふるひあはせてあまつらにはあはす
へしあはせたるおりはかうはしとおほ
えす丁子などのかは⁵⁷⁹やきを⁵⁸⁰かきなれたる
ほとなるへし廿日ハ⁵⁸²かりわすれてとりいて、
かくに⁵⁸⁴そかうはしきものなるなつあはす
583

59 ウ

なるハかたきよし⁵⁸⁶なるなりふゆハしる
なれともまたのひハかたまりぬくさく
もの⁵⁷²をひにたきたてかくにくさく
か⁵⁷⁸ゆる⁵⁷⁷をは⁵⁷⁵いる⁵⁷⁶か⁵⁹⁶すに⁵⁹⁷すこしき⁵⁹⁷らさ
すかうはしき⁶⁰¹物の⁶⁰¹おほく⁶⁰²いるハ甲香也

合春

姚家

60 オ

472 よき鶴小葉杏小葉岩小葉

神よき葉

473 はりて杏岩はりて、神はりて、

474 やおら鶴杏岩羣やをら神やおら弱

475 つ、神 ゆれ

476 すれハ鶴杏岩すれは神 ゆれすれハ

477 細かなる鶴杏岩こまかなる
神細り切る

478 みめハ鶴杏岩みめは羣みめ
神見目みめハ

479 たく神 くれ

480 みめ鶴杏岩みめは

481 わろく杏岩わろけ

482 はふれかまし杏岩はふれかまし、
羣ハふれかまし神はふれかまし、
なるそ神 る 眼を

483

484 くさく神 くさく

485 かうはしき神 香かうはしき

486 はて神 終はて

487 いる神 入いる

488 ちむ羣 沈ちむ神 沈ちむ

489 き岩 キ ま

490 に杏岩を

合香 天 後物ニ入テ花乃木ノ下土中に高埋之
知章朝臣

五葉ノ松下ニ可埋春秋七日夏五日冬十日

山田尼

茶碗のつほもしハつきなとにいれてふたよく

おゝいてそくひしてかみおしてよくみつ

いるましく封して梅樹のもとにうつむ

へしそれあめなどいりてなかるゝもあし

かりぬへし花の木のしたのつちをもの

にかきいれてうつみたるいとよし又水の

ほとりみちのつしむまのやのなかにもの

にしたかひてうつむへしあるいは十日

もしハ廿日なとうつめくろほう梅花などに

木のしたにうつみて春秋は五日夏ハ

三日冬ハ七日ありてとるへしつちをほる

こと二尺許なり

諸香

沈

證類云置水中則沈故曰沈香次不沈者曰

浅香似雞骨為雞骨香似馬蹄為馬蹄

香枝條細實為青桂云々

64
ウ

64
オ

63
ウ

527 以糲節之、
罌 以糲節之、

528 任各兩數斤定 神 任各兩數斤定

529 神 ここに左記の書き入れ有り
貞丈按香具ヲ和合スルニ其次第アリ
先後ノ次第ニ依テ(改行)成劑ノ後
芬芳ヲ氣ニ異ナルフ有ヘシ譬ハ砂糖
ト酒ト合(改行)スルニ砂糖ヲ先ニ
シテ酒ヲ後ニスレハ味苦シ酒ヲ先ニ
(改行)シテ砂糖ヲ後ニスレハ味甘
シ先後ニ依テ味異ナルカ如シ

530 和合次第(ハ)ハスペース
罌 罌 罌 (スペース無し)
神 ○和合次第

531 丁 罌 罌 罌 丁 神 丁

532 合 神 合

533 可 罌 少可 罌 少レ可

534 沈 罌 罌 次 罌 罌 次ニ

535 ハ 罌 (無し)

536 罌 罌 ここに「ヲ」有り

537 薰 罌 罌 (無し)

538 云々 罌 罌 (對)ニ 罌 罌 罌 (對)、
罌 對 神 云云

539 罌 罌 ここに「ニ」有り

540 ニ 罌 (無し)

541 合テ 罌 (無し)

542 快ヲ 神 快ツ